



日本美容皮膚科学会
Japanese Society of Aesthetic Dermatology

第41回日本美容皮膚科学会総会・学術大会

NEVER SAY NEVER

ロート製薬

ランチョンセミナー8

コスメシューティカル時代の オンライン販売を考える。

2023年 8月20日(日) 12:00~13:00

第2会場

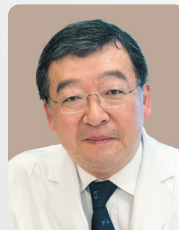
京王プラザホテル コンコードボールルームB

座長



川島 眞 先生

東京女子医科大学
名誉教授



尾見 徳弥 先生

クイーンズスクエア
メディカルセンター皮膚科

講演 1



川島 眞 先生 東京女子医科大学 名誉教授

コスメシューティカル
オンライン販売の現状と課題

講演 2



船坂 陽子 先生 日本医科大学皮膚科 教授

コスメシューティカルの機能を理解する
—ハイドロキノンを中心に—

共催：第41回日本美容皮膚科学会総会・学術大会／ロート製薬株式会社

講演 1

川島 眞 先生

東京女子医科大学 名誉教授

略歴

1978年 東京大学医学部 卒業
1978年 東京大学皮膚科助手
1984年 パリ市パスツール研究所乳頭腫ウイルス部留学
1986年 東京大学皮膚科講師
1988年 東京女子医科大学皮膚科助教授
1992年 東京女子医科大学皮膚科主任教授
2018年 東京女子医科大学 名誉教授
現在に至る

コスメシューティカル オンライン販売の現状と課題

近年、化粧品の販売、購入方法が大きく変化してきている。対面販売が主流であった様式からオンライン購入が急速に広がり、さらには消費者同士で行われるオンライン上の違法な転売行為も散見されるようになった。時代の流れと云ってしまえばそれまでだが、消費者の目的に合致した化粧品か、使用感は満足できるものなのか、さらには化粧品の塗布するに適した肌状態にあるかの判断は消費者任せにならざるを得ないという問題が生じてきた。

特に気を付けるべきは、これまで皮膚科での取扱いを中心に販売されてきたコスメシューティカル（機能性化粧品）である。ハイドロキノン、トレチノイン等の成分を含有する医療機関で専売されるべき化粧品は、使用者が使い方を誤るとその機能を十分に発揮できないどころか、副作用を起こす懸念があるためである。

オンライン購入は今後も拡大の一途を辿るであろう。その流れを止めることはできない。とすれば今こそ、消費者が化粧品の成分、効能、安全性、使用法の情報に容易にアクセス可能であり、正しく理解して使用すること、すなわちコスメ・リテラシーの向上のための環境整備が急務と考える。

講演 2

船坂 陽子 先生

日本医科大学皮膚科 教授

略歴

1984年 神戸大学医学部卒業
1988年 神戸大学大学院医学研究科修了、医学博士
1989年 米国Yale大学医学部皮膚科研究員
1996年 米国Cincinnati大学医学部皮膚科研究員（文部省在外研究員）
1996年 神戸大学医学部附属病院講師
2009年 神戸大学大学院医学研究科皮膚科学分野准教授
2010年 日本医科大学皮膚科准教授
2014年 日本医科大学医学部皮膚科学教授
現在に至る

コスメシューティカルの機能を理解する ーハイドロキノンを中心にー

コスメシューティカル、すなわち機能性をもった化粧品として多くの美白化粧品が開発されている。美白化粧品の開発において、メラノサイトにおけるメラニン生成酵素チロシナーゼを抑制する作用が確認されているものが多いため、理論上はできてしまったシミを薄くすることができる。これらの中でも、70年余りの使用歴のあるハイドロキノン、その高い美白効果によりシミ治療における美白剤の王者たる位置付けになっている。しかしながら使用時にはいくつかの注意点がある。すなわち炎症反応が生じやすいこと、酸化により細胞毒性の高いベンゾキノン体が形成されるために遮光が必須であること、ハイドロキノン本体も酸化しないような保存が求められること、などである。ハイドロキノンは医薬部外品ではなく、化粧品の成分として使われるために高い美白効果があるにも関わらず化粧品の範疇に入る。医薬部外品でないために含有濃度も規定されておらずさまざまなものが市販されている。ハイドロキノンにはメラノサイトに対する細胞毒性もあることから、経皮吸収の高い製剤や高濃度の製剤を使用した場合に白斑を生じる可能性もある。従って高濃度のハイドロキノンの使用に関しては医師の監視下で炎症症状の有無、遮光が守られているかなどをチェックし、漫然と使用するのではなく、3 - 6カ月と期限を決め、また休薬期間を設けて使用すべきである。